

音

の

ま

に

ま

に

Music Life

SIX

映画評論家、演出家、作家、ミュージシャン、そしてバッグデザイナー……様々な顔を持つ木村奈保子さん。今回のエッセイは“表現方法”。ポジティブにチャレンジし続ける木村さんだからこそできる「表現」があります。その場その場で与えられた仕事で自分の「表現」をするために、木村さんはどう向かっていったのでしょうか。



ウィーン・フィルハーモニー交響楽団首席奏者のワルター・アウアーさん(左)と、同じく首席のカル＝ハインツ・シュッツさん。アウアーさんはNAHOK製品を愛用している

自分のスタイルを確立するために

今回は、エンタテインメントに関わる人々の“表現方法”について話したい。

人には、自分の好き嫌いとは別に“資質”というものがある。生まれながら持ち合わせた“性質”、あるいは考え方や環境によって身につけてしまった“イメージ”だ。それによって、本来の自分と異なるキャラクターや役割を背負い、なかなか自分らしさを表現できない。

私も若いころは、その一人だった。

宝塚男役になれるようなスタイルもないし、その上フェミニンな衣装が妙にハマる。

「誰だろう、これ？」と引いて見る本当の自分が、別にいる。

やがて就職を考え、標準語を身に付けたとき、「ポーカーフェイスのあなたは、“アナウンサー”という仕事に向いているかも」と言われて、キャリアはそこからスタートした。

テレビは原稿があるため、淡々と読んでいれば、なんでも知っているように見える。恥ずかしながら、新人はみな、こんなものだ。

その点、「評論家」、「物書き」は、個性と考えを強く求められ、アナウンサーとは180度異なる“資質”を必要としている。私はここに自分の居場所を発見したのだ。

原稿という真っ白なキャンバスを与えられ、自分の思想を展開する。文字がすらすら落ちてくる瞬間は、苦しさから快感に変わる。

かくして、何年も映画を中心に原稿を書き、その上テレビ番組の制作で構成台本も書いていた。

しかし、人はテレビの印象が強い。ゴールデンタイムの映画解説で再び出演依頼が……。私はこのころ、自分の内面にある思想を確立していたため、表面に出る“ぼんやりした自分の顔”を演出力でカバーする方法を必死で考えた。

無個性のアナウンサー顔にならないよう、いかにキャラクター作りをするのか？ 衣装や表情を研究したが、なかなか満足はできなかった。

他局の解説者は、みな最初から映画スペシャリストであり、物書きであり、生まれながらの自分らしい話し方をしており、誰も矯正された標準語などつかっていなかった。

私は、なんとかアナウンサーだった過去がばれないよう、違うスタイルを試みた。

いつも膨大な資料と考えがあるなかで、原稿量はわずか。短い時間にコメントを収めるため、原稿は削りたくないから、早口になるほかない。

収録を早々と終わることができるため、これが唯一スタッフには喜ばれたことかもしれない。このころ、“1分ひとりしゃべり”に賭ける私の密かな挑戦は、原稿にリズムをつけていたことだ。升目だけでなく、ことばを4分の4拍子＝16ビートで、足踏みをしながら、書いていた。気づいてくれた人はわずかだが……。

一定のリズムをベースにして、言葉を書いていくと、もう少しで歌になる。映画を題材に、



気に入った AMADEUS チョコのバッグを持つ
カール＝ハインツ・シュッツさん

自分の思想を音楽のように伝えるという、これが私流解説。
自分の芸の無さを演出力でカバーするというセルフプロデュースの
始まりだった。

もっとも、私の中では、原稿を書いた時点で90%の仕事を終えてい
たつもりだが、残念ながら他人の目につくのは画面の印象のほうだ。
衣装、ヘアメイク、照明……ああ、彼らの手助けなしに、ずばらな私は、
もっと芸無しに見られただろう。デザイナー衣装に広告系のメイク
さんから映画女優付の照明さんまで、厳しい私の要求に応じてもら
うためには、ひたすら頭を下げるしかない。だって、制作費が限ら
れているのだから。

本当に、女って、めんどうだ。

しかし、人前で披露する仕事は、しゃべりであれ、歌であれ、演奏で
あれ、最高の見せ方が必要だと思う。

クラシック奏者でも、アイドル売り、ソロコンサートなどがあり、日
本では見た目の演出が不可欠。

私が気になるのは、結婚式のお色直しやお呼ばれ用専門店にありが
ちな、淡いひらひら系のドレス。せっかくの演奏が安っぽく色で、
台無しになる。

着馴れていないドレスをひきずっているような姿勢も、演奏の前に
見ると、トーンダウンさせる。

演奏者なら、演奏会前に、急にドレスを買うのではなく、普段から生
地をチェックして、ドレスを作ったり、ウィッグをつけるなど、自分
らしさを日々研究すべきだろう。それは、“音”を彩る美学だ。

肉体的な欠点を徹底的に生かすのか、隠すのか、確固たるファッシ
ョンスタイルを決めて、演奏日にのぞめば、自信も余裕も出るだろう。
肉体的に欠点はあるとしても、結局は“音”が命。

始まるなり、“鳥肌”の演奏を聞かせてくれたら嬉しいに決まってい
るが、そんな天才は一握り。

私が特に気になるのは、若さと女性が“売り”の演出だ。レコード会
社や事務所がついてから、わざとらしいポーズやお色気ファッショ
ンでキャラが変わる。

本人の強い意志があれば別だが、たいていはやらされているだけだ
から、安っぽく見える。

演奏しながら体をゆらすポーズも、ダンサブルに見せるための演出
だが、芸が無いと品位を下げってしまう。

普段から踊りながら演奏する人なら、それはそれは素敵なのだが。
また、特に多いのは、わざとらしいカメラ目線。“かわいすぎる”(?)
演奏者ともなると、その容姿が話題になるのは仕方ないが、下手な
カメラ目線で、しかも意識しすぎて演奏がおろそかになり、嫌味に
なる。

やがて、容姿とともに芸は衰える。

周囲の扱いに流されず、自分のスタイルを築くまで黙々と芸を磨く
こと。そうすれば、女性に与えられた音楽寿命は、平等で、永遠だろう。



Information

NAHOK(ナホック)新作のご紹介

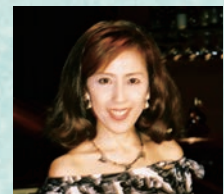
NEW フルート2コンパートメントブリーフ 4カラー

前はまち幅が厚いワイドブリーフでしたが、今回は2コンパートメントに仕分けしたWファスナーブリーフ。
これまでフルートブリーフはC管専用の横幅でしたが、今回はH管対応で大きくなりました。

[カラー]①ホワイト/ピンクライン・ピンクレザーハンドル ②ブロンズグリーン/ブロンズグリーンライン・チョコレザー
ハンドル ③ブラック/ブラックライン・ブラックレザーハンドル ④ミント/ミントライン・チョコレザーハンドル
[仕様] 外装:スーパーティルト(防水、UV、防汚加工などを施した軽量かつ強靱なドイツ製特殊ファブリック)、内装:ス
ーパーヒートインシュレーター(欧州製強力断熱、耐湿度、耐衝撃素材)

[サイズ] 外寸:縦28cm×横44cm×幅(ケース側 厚み7.5cm+かばん側厚み 3.5cm)
内寸:縦27cm×横43cm×幅(ケース側 厚み6.5cm+かばん側厚み2.5cm)
重量:1080g(リュック兼用ショルダーベルト付属2本を含まない重さ)

<http://nahok.ocn.net/product-list/371>



木村奈保子

映画評論家、作家、演出家、NAHOKデ
ザイナー。京都外大卒業。CBC局アナ
から映画評論家へ転身。

ゴールデンタイムの映画解説を17年間
勤め、同時に演出家としてテレビ番組
やファッションビデオの制作や、著作、
講演なども多数手がける。昨今は、映
画音楽の演奏活動やプロデュース、ダ
ンス舞台の演出ほか、画期的な楽器ケ
ースを研究開発、デザイン。文化的かつ、
アントレプレナー(企業家)の資質で活
躍する。

www.kimuranahoko.com/